

# 総 括

サカモト ノブユキ  
坂本 信道

国際連携委員会の委員長を務めさせていただいております、京都女子大学の坂本信道です。この委員会は、国際日本文学研究集会の企画・運営を担当しております。歴代の委員長は海外における日本文学研究に精通しておられたので不安は微塵もなかったのですが、わたくしはこの方面にとんと疎いものですから、皆様方にさぞやご不便・ご迷惑をおかけしたのではないかと危惧しております。さて、総括では、発表・ポスターセッション、あるいはシンポジウムについてコメントを申し上げることが常のようですので、今回もそれに倣い、プログラム順に卑見を述べることにいたします。以下、個々の題目については省略いたしますので、プログラムをご参照ください。

## 【初日第1セッション】

陳華栄さんのご発表は、東海散士『佳人之奇遇』の、19世紀末の中国語への翻訳における改変の具体相についてのものでした。珍しい翻訳書の紹介もさることながら、民族間の対立が翻訳に反映しているという指摘は、翻訳という行為にも社会問題が窺視できることを示してくれました。これまで政治思想を中心になされたきた比較・分析を、文学と翻訳の新視点から行うものでした。

島尾敏雄の『死の棘』を取り上げられたのは、モフロワ ヤニックさんです。近年公開された作者の手帳を検証することで、創作過程の迷走を追い、改稿に次ぐ改稿を経て、小説内の時間が「神話的な時間」へ変容し、未完成が小説の基本構造となっていくことを洗い出した考察でした。草稿に逐一記入された日

時表記から、作者島尾の性格や、作品の生々しい生成過程もよくわかりました。

フィティヤニ アンワルさんは、『父帰る』がインドネシアで映画化された折の脚本についてのご発表でした。原作では士族の出とされている父の名前をイスラム社会で貴族を表すものにしたたり、期日の設定を孟蘭盆から「断食明けの翌日」に変更したりなど、脚本への翻案に固有の、小説への翻訳とは異なるありようを提示してくれました。文化の伝播に関して我々は、通時的にも共時的にも原典至上主義を少し反省すべきかも知れません。

### 【ショートセッション1】

梁鎮輝さんは、中国の知識人の著書を通じて、日本の近代が拓かれていく様相を、墨子受容の点から明らかにしようとするご発表でした。西洋に規範を求めることが主流だった時代に、それを中国の古典に求めた露伴の特異さと、その受容の国家神道の側面の指摘などによって、知識人として時局とどう向かい合っていたかという、新しい露伴像が示されていました。

許圓圓さんは、佐藤惣之助『琉球諸嶋風物詩集』にエキゾチックな表象、すなわち琉球固有の植物・動物・女性の習俗などが多く読み込まれている点について、作者の生きた時代ゆえの限界を指摘なさいました。都と鄙における、都のがわの優位に立つ者としての目線とすべきでしょうか。作品が求めた琉球と現実の琉球のありようの見極めの難しさ、面白さがあると思います。

次のチアッペ=イッポリト マティアスさんは、直前になって、不可避な事情によりご発表がかなわない仕儀となってしまいました。たいへん残念なことです。またの機会にエントリーしていただければと思います。

林圭介さんの村上春樹『恋するザムザ』についてのご発表、これは作者による自作のrewriteという、村上文学ならではの視点からのものでした。原作（外国語）→翻訳（日本語）→翻案（日本語）という過程の中で生じるズレやブラシの問題というべきでしょうか。翻案にあたっての言語遊戯的一面にも触れ、翻訳と創作の境界という、スリリングな課題の提示であったと思います。

## 【ショートセッション2】

チェンドム アンドレアさんは、黄表紙『鸚鵡返文武二道』の翻訳作業についてのご発表でした。黄表紙という日本語の現代語訳でも一筋縄でいかない作品群を、いかにその雰囲気を保ったままハンガリー語に訳すか、という作業の具体相を示してくれました。掛詞や駄洒落などの翻訳困難さを、訳文と注との使い分けで解決した方法や、「挿絵の翻訳」という言い方は示唆に富むものでした。

ジェルリーニ エドアルドさんのご発表はなかなか異色の理念的なもので、文学および文学研究そのものについての問題提起でした。書写すなわちコピー（複製）によって伝わる古典文学作品は、どれほどすぐれていようとも原本が残っていないければ「世界遺産」とはなりえないということを起点に、文学の特殊性をあらためて気づかせ、芸術の価値とは何かを問い、ひいては「世界遺産」をむやみにありがたがる風潮へ一石を投じるものであったように思います。

以上で集会初日は終了し、続いて懇親会が催されました。発表者やシンポジウムの先生方を中心に、研究内容についての談義はもちろん、人的交流として名刺交換もあちこちで行われていました。これを機会に研究上の交流、とりわけ異なる分野の人どうしの交流が深まれば、思いもかけないような新しい研究が展開されるのではないのでしょうか。それがこの国際日本文学研究集会の大きな目的のひとつでもあります。

## 【最終日第2セッション】

チトコ マウゴジャタ カロリナさんは、中世の『万葉集』受容を、藤原清輔と藤原俊成という二つの歌の家の、歌書への引用による自家の権威・正当性の主張という点から分析なさいました。『万葉集』の情報占有の意義です。生涯一書が基本であった歌論書を、清輔・俊成が多数著したことはテキストの流動性へとつながったとし、史的な面からの評価も行いました。

フィットレル アーロンさんは、ハンガリーで出版されたヴィツラーニ『反射』という、西行の和歌に基づいた作品についての発表でした。原歌から離れ

て翻訳されたものも多く含むとのことですが、選歌されたものは桜と月が多いというのは、西行がどのようにイメージされているかを示しているようでした。スクリーンに投影されたものと配布された資料が別だったので、内容を追いかけるのが少し大変でした。著作権の関係などもあるかもしれませんが、工夫いただけると専門外の者にはありがたいです。

李暁源さんのご発表は、「水足氏父子詩巻」に寄せた荻生徂徠による序文を、徂徠学成立に深く影響したのではないかという観点から、徂徠が詩巻をあえて誤読したのではないかという解釈を提示するものでした。朝鮮通信使と対峙して「文戦」でそれに打ち勝ったことを、秀吉の朝鮮出兵の戦利品と同等視することに、徂徠学派の卓越を見せる意図を看取り、近世思想史の中に当該資料の価値を位置づけようという試みであったと思います。

梁蘊爛さんは、『絵本通俗三国志』に付された挿絵の変化の分析を通じて、版元の経営状態、刊行継続のためのさまざまな試行錯誤や努力などを明らかにされました。編集人や出版元、巻末広告、予約出版という販売方法などに着目した上での分析は具体的で、清水市次郎という人物の出版活動だけでなく、当時の出版業界の状況が克明にわかるものであったと思います。

### 【ポスターセッション】

最終日の昼休みの105分間に行われたポスターセッション、今回は6つの展示・説明が行われました。少しでも多くの情報を提供したいという思いからか、ポスターの文字・画像が小さいものもあり、人が多く集まると近寄れず、ちょっと見にくいかな、というものもありました。思い切って要点を絞っての展示ということも重要だと思います。文字と口頭説明のバランスです。部分の拡大図なども有効ではないでしょうか。別刷りの資料を用意し、詳細はそちらをご参照という工夫をした展示は、あとで見直しも出来て助かりました。

クローデル ソフィーさんは、母語以外の言語で書かれた作品を「越境文学」と定義、バルシャ語を母語とし日本語で執筆するシリル・ネザマフィの『サラム』についてでした。他の越境文学作家も視野に、今後の発展が期待されます。

高橋俊彦さんの展示は、絵入狂言本の上本、並本を比較し、滑稽なやりとりや小歌が省略される傾向にあると指摘。上本・並本の両方が残る作品が少ないなど制約は大きいですが、狂言台帳や評判記への広がりもあることでしょう。

苗鳳科さんは、1972年から1978年の中国で翻訳された日本の小説を分析、社会派作家の厚遇と漱石・三島の冷遇の例から、政治的背景を説明していました。個々の作家についての詳細は発表や論文で明らかにされることでしょう。

虫明美喜さんと佐藤勢紀子さんによる展示は、留学生への日本語教育の現場での取り組みとその成果についてでした。地元仙台についての正岡子規の文語文を教材に、留学生と日本の大学生にペアを組ませ学修を進めることによる双方への教育効果は、ひとつのモデルの提唱と言えるでしょう。

皆本智美さんは、水村美苗『本格小説』が人物の世代や語り手の設定などで、『嵐が丘』をもう一次元複雑にした構造を持つこと、『本格小説』の海外での評価と日本でのその違い、あえて『嵐が丘』に拠った作家の野心的方法などについての展示でした。ご専門は英文学だそうで、日本文学以外からのエントリーがあるのも、当研究集会には歓迎すべきことだと感じました。

春日美穂さん、小菅あすかさん、高倉明樹子さんのお三方による展示は、古典のデータベース作成の試みと成果についてでした。データ化のきっかけは、日本古典文学と仏教の専門家の間の、情報・知識の共有があまり進んでいないことを打破したいとの思いからだそうです。公開に伴う著作権の問題は、個人ではいかんともしがたく、国文学研究資料館のような機関によって、オープン化が推進される必要をあらためて痛感しました。

## 【シンポジウム】

第42回のテーマは「いささの表象」です。司会の櫻井陽子先生も冒頭でおっしゃっておられたことですが、このテーマが決まったころは、米朝戦争の可能性が新聞やニュースで盛んに取り上げられるなど緊迫したものでした。2018年秋、いささか緩和されたとはいえ、予断を許さない状況にあることは、皆様ご承知のとおりです。そうした中で、中川成美先生、金容澈先生、大津雄一先生

には、それぞれのご専門から、これまでの戦争とそこから生まれた文学・絵画についてご発表・ご討議いただく機会を得ましたことは、たいへん有意義でありたいことであつたと思います。シンポジウムでのご発表・ご討議、あるいはフロアからのご質問については、わたくしなどが容喙する水準をはるかに超えておりますので、ここでは控えさせていただきます。ただ漫然とした感想を述べさせていただくならば、中川先生がご自分の脚でたどられて来られた近代大量殺戮戦争の痕跡の写真を見ますと、その現場にいた方が今まさに自分と同じ場にいるという生々しい衝撃を感じましたし、金先生の元寇図の図柄の変遷などを見ますと、はるか昔の戦いの記憶が数百年の時を経て、政治的に別の文脈の中で変容し復活するという恐ろしさがありました。大津先生の取り上げられた、西洋文学における残酷なまでのリアリティを持つ描写と日本文学の肉体や血肉の描写のない端麗な戦場の描写の相違は、興味深さと同時に、その端麗さが先の大戦に唱えられた精神主義につながっているのではないかと想像したりもしました。

一瞬にして大量殺戮が可能になってしまった現在、ひとたび戦争になればひとりの人間の死などいちいち取り合っていられない未曾有の事態が将来されることは間違いありません。武力によって武力を止められないことは過去の歴史に明らかです。文学は戦争の抑止に実効性を持ちません。しかし、失われた命や流された血に対し、そのひとつひとつに思いを寄せることは文学・芸術の使命だと思われまふ。過去の悲惨な事態への想像力が、ひとりでも多くの人に宿ること、希望はそこにあるのではないのでしょうか。今回のシンポジウムを聴いて、その思いをいっそう強くしました。

以上ですべての日程を無事に終了することが出来ました。シンポジウムで登壇いただいた先生方、発表者の皆様、国文学研究資料館の教員ならびに事務職員をはじめとするスタッフの方々、国際連携委員として携わってくださった先生方、そして会場においでのみなさま、さらには集会のインターネットでのライブ配信を御覧になってくださった諸氏に、あらためて感謝申し上げます。二

日間まことにありがとうございました。

なお、来年2019年度の第43回国際日本文学研究集会は、11月16日(土)と17日(日)です。さらなる盛会となるよう、みなさまのご協力をお願い申し上げます。